西陣明治の群像⑱

ジャカード発展期の祖②

鳥居精三郎

明治三十年代は、西陣機業の洋式工業化の第一段階が終了した時代である。

伊達虎一のヴァンサージ機につづいて、フランスに留学した鳥居精三郎は、ヴェルドール機と彫台を持ち帰り、西陣に新しい織法を伝えている。

鳥居は明治三十六年の大阪博覧会にヴェルドール機を出品したが、コンパクトでしかも精巧な構造の同機は注目され、西陣の機業家たちも相次いで、これを導入したという。

ヴェルドール機の特長は、ヴァンサージ機よりさらに小型であるにもかかわらず、千八百口という高口まで可能で、しかも紋紙が小さく、巻紙状のものを使用するので取扱いもきわめて容易であった。従来のジャカードにくらべ紋紙の費用が半額ですみ、機械設備の償却が容易であったという経済性が見のがすことのできない特長である。

鳥居は明治三十九年、鳥居栄太郎、山田九一らの協力を得て、ヴェルドール社を設立し、同機の輸入販売と紋繋事業を始め、同機の普及につとめている。同機は精巧であるゆえに工場環境にも留意しなければならなかった。紋紙が特殊なものであるため、わが国の湿度の高い気候では伸縮が一定せず、それが機械の操作に微妙な影響をおよぼす。鳥居はながねんの研究を重ね、工場に湿度管理を指導するなど、いわば品質管理という近代思考を、そこにもりこんでいる。その点においても工業化の萌芽を見ることができる。

ヴェルドール機に使用する紋紙は、当時国産できず、輸入品に頼っていたため、第一次世界大戦後、輸入ができなくなり、同機はそれとともに衰退してしまったが、紋織機のもっともすぐれた織機として評価されている。

しかし、鳥居精三郎らの研究によって、西陣の紋織物は、精緻でしかも、すぐれた製品を産出できるようになった。伊達虎一とならんで鳥居精三郎も西陣を洋式工業化に導いた一人といえよう。

（福本武久）